(161) 岩手県久滋琥珀博物館

本博物館はインターネットで検索すれば、当ホームページにたどり着ける。現地訪問のための詳細な情報はこのホームページで確認できよう。が、以下では、現地を訪問した著者なりに、現地の紹介を各種資料を用いて行っていく。

余談：琥珀は世界的にはロシアのバルト海地域産が有名である。この琥珀を部屋の壁全体に使用したサンクトペテルブルグのエカテリーナ宮殿の「琥珀の間」も有名である。が、８０年前の独ソ戦争時、ドイツ軍がレニングラード（サンクトペテルブルグの旧名）に進撃した時、この琥珀の間はドイツ軍の略奪にあって、消滅した。独ソ戦に勝利したソ連邦がこの琥珀の間の修復に取りかかったのが、３０数年後の１９７９年からであり、ソ連邦の崩壊後の２００３年に完了した。修復に２４年もの長き年月を要した。なを、著者は修復中のこの琥珀の間を何度か見学をしたことがある。

が、日本の琥珀もそれほど無名ではない。特に、岩手県の久慈で産出される琥珀は、その品質の高さ、その埋蔵量の大きさで、それなりの人達には知られている。久慈では現在でも採掘が継続されている。久慈の琥珀を紹介している本博物館の展示品は豊富である。売店もあり、現地産の琥珀を購入することもできる。また、琥珀採掘体験コースも準備されている。道具類は貸してくれるので、手ぶらで結構である。今回の訪問時、琥珀産出地層で１０人ほどのグループで１時間ほどの採掘を体験した。予想はしていたが、殆ど誰も、肉眼で確認できる琥珀は採取できなかった。そのこともあろう、採掘終了後、残念賞として琥珀の御守りをいただいた。思うに、確率的に、1回、２回では琥珀を自前で採取できそうはない、５回以上ならば大丈夫かも。びっくりするような大物の琥珀を採集できる体験者は偶にいるらしい。なを採集の様子等を撮影するのを忘れていた、残念。

訪問日　　２０１９年８月

図１　岩手県沿岸北部の地図である。赤丸３つで、「久慈琥珀博物館」、「野田玉川鉱山跡にあるマリンローズパーク」、田野畑鉱山跡の位置を示している。遠方からこの地域を訪問するならば、折角なので、抱き抱えで訪問するのを勧める。ただし、田野畑鉱山跡へは現時点で入山禁止であることに注意すること。足としては、太平洋岸に沿って延びている４５号線を利用することになろうが、現在この４５号に平行して、新たに自動車専用道路「三陸道」も部分部分ながら開通し、伸び続けている。現在、無料利用期間中である。これも利用できよう。或いは、三陸縦貫鉄道の北部はほぼ貫通したので、三陸鉄道を利用するのも良いであろう。東北道を北上して久慈に行くには、盛岡から北上山脈を横断するより、東北道を更に北上して、八戸道に入り、九戸ＩＣから久慈に向かった方が時間は短くて済むと思うが。

図２　三陸鉄道の久慈駅当たりから、久滋琥珀博物館への経路を水色の曲線で示している。久慈駅から７号に乗って南西方向に来たならばＡ点で右折する。山村に入って行ってのＢ点が博物館。Ｃ点は琥珀採掘体験場。ＢとＣの間はマイクロバスで参加者を運んでくれる。

琥珀博物館写真

写真１　図２中のＡ点である。写真中央少し右に博物館への黄色の案内看板が見えている。久慈駅方面から来たならば、手前にある橋を渡って直ぐに右折をする。後は川に沿って西行していく。

写真２　図２中のＢ点の所。博物館前である。一帯が博物館、その他関連施設の敷地である。右側に駐車場がある。

写真３　施設案内看板である。印刷前にこの写真を拡大して見れば、各部の詳細が見て取れよう。

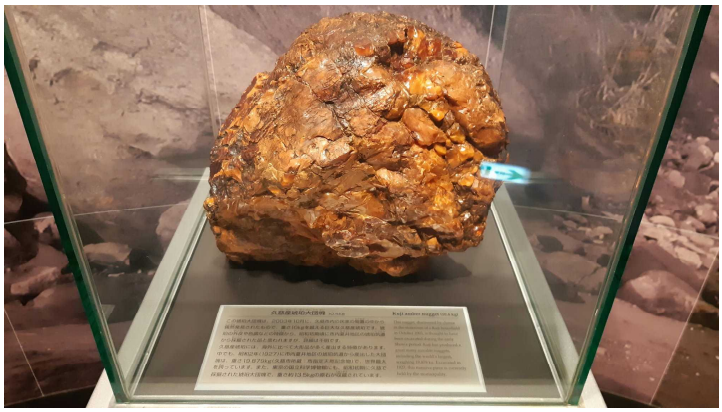

写真４　博物館内で展示されていた現地産の琥珀の巨大な塊。

購入等鉱物写真

写真５　琥珀採掘体験の残念賞として
もらった琥珀の御守り

写真６　売店で購入した「琥珀の缶詰」。
砂の中に小さな琥珀が混じっており、
ピンセットなどで拾い出すというもの。
小さな琥珀が結構入っていた。

写真７　写真６で示した１つの缶詰からの「採集物」。ピンセットでつまみ上げられる物だけを採集した。残った砂の中にはルーペで見ると、いくらでも微少な琥珀が残っていた。

写真８　写真６で示したもう１つの缶詰からの「採集物」。

資料

写真１０　博物館内の展示物の１つ。久慈一帯での琥珀採掘場所が表示されている。琥珀は古生層砂岩である国丹層と玉川層に内在している。かっては多くの場所で琥珀が採掘されていた。ところで、岩手県の鉱山についての解説書である参考文献（１）には､何故か久慈の「琥珀鉱山」は全く記述されていない。琥珀は「鉱物」には分類されないのであろうか？　そう言えば、真珠は「宝石」ではないと言われればそうとも思う。「鉱物」、「宝石」の定義は難しい。が、この坑道の分布図を手引きにして、現地の山野を散策すれば、今でもズリ跡などから小さな琥珀は十分に採取できると思う。

参考文献

（１）「新岩手県鉱山誌」、高橋維一郎、南部松夫、東北大学出版、２００３年。